

出石邦保教授を偲んで

栗 栖 弘 典

(大学商学部教授)

出石さんと最後の言葉を交して別れてから既に半年以上が経った。

晴天の霹靂のような入院の知らせを聞いてのち、予期せぬ訃報を受けたのは、わずかに週間後の八月三十日の夕刻であった。八月七日―それは入院の前日であった―昼過ぎ、人影の少ない至誠館五階の研究室の廊下で出会い、車まで送って別れたのが出石さんの同志社からの最後の帰宅になってしまった。確かにその時身体の不調と頭痛を訴えられていたが、平素から人一倍健康に留意する人であり、また長く学内の体力づくり委員会の委員長として我々教職員の健康管理に熱心であった出石さんだからそれ程重大なことも思わず、ただ精密検査の受診と休暇中の休養を勧めた程度で、休暇明けの再会を約して別れたのであった。

考えてみると、学園紛争につづくこの十年余の間は、同志社にとっては創立百周年という大きな歴史の節目を迎え、教育・研究条件の改善等の論議の中で、校地問題の解決という困難な課題に直面した時期であった。そして、「田辺新キャンパス建設」の目標が設定され、その実現に向って全学の努力を結集して

行かねばならない極めて多忙の時であった。

このような時期、田辺整備計画の概要がはじめて示された昭和五〇年当時、出石さんは商学部長として大学部長会の重要な一員であり、また昭和五二年には人文科学研究所長として大学執行部を補佐し、さらに五八年、田辺計画決定の最終段階においては、学長より全学教学問題検討委員会委員を委嘱され、今出川・田辺二拠点体制に対する教学の基本的方針を示す答申の作成に尽力されていた。何事につけ物事のよく見える出石さんであったから、この間我々には予想されなかった大きな心の負担と重い疲労が除々に蓄積していったのではなかったかと思われる。

出石さんは自分でも認めていたが、いわば変動の時期を生きた人であった。昭和四年一月に生まれ、敗戦という大変革を経験したのは当然としても、小学校が国民学校に、五年制中学が四年制に、大学が新制大学に、そして大学紛争を経て同志社の二拠点化の時に会したのである。勿論、この時期の多くの日本人は大なり小なり似通った経験を持ったのであるが、私の記憶に関する限り、出石さんはこれらの変革の時期に立派に対処して来た



人であったと思っっている。

問題を明確に把握、適確に分析し判断する。迅速な方針の決定と周囲への働きかけ、明解な説得力そして巧みな組織化。何にもましてまず行動の人であった。問題を語る言葉の平明さに感心したことや、その主張の積極性に圧倒されたこともあり、またその行動の徹底ぶりに驚かされたこともあった。しかしこれらの印象の中から強く心に残るのは、目的に向かってこれを実現しようとする強い熱意であった。それを支えるものは何であったか。或は学部を思うことであったかもしれないし、或は同志社を思う心であったかもしれない。また、広く自らの存在とかわるもの、人を愛し、思うというところからであったかもしれない。しかしそれがいずれであっても単に坐して思うのではなく、それが常に行動に結びつけられていたのである。出石さんはその「内なる思い」に動かされれば動かされる程、より広く、深く自らを問題にかかわらせ、課題に立ち向かわせて行ったのではなかったかと思う。

専門を異にする私は、日本商業学会の理事でもあった出石さんの専門領域についてふれ

ることは出来ないが、地元、京都府・市に協力して行った実態調査等を通じて、伝統産業の問題、小売商業・消費者行動に関する問題等にも強い関心を持ち、また京都商工会議所商業活動調整協議会委員、京都府産業教育審議会委員、宇治市行政改革審議会委員長、さらに大学基準協会調査委員会委員を務める等その活動分野の広さ、問題意識の大きさに驚く程である。

昭和二九年専任講師就任以来出石さんの教えを受けた学生は多かったが、五七歳の生涯は、その業績、関心の広さ、そしてこれからして欲しかったことなどに比べてあまりにも短かすぎた。出石さんを奪った天の非情が残念でならない。

かつて商学部には客員教授として招聘したミネソタ大学のR・J・ハロウェイ教授がこの二月に京都に來られた。ミネソタは出石さんが二度の在外研究で過したところである。親交のあった教授は出石さんの墓前に深い哀悼の意を表わされたときく。

心から出石さんのご冥福をお祈りする。

松下紀美子先生を偲んで

片山登美子

(女子大学教授)

松下紀美子先生は昨年七月二十九日、余りにも突然五十五年の生涯を閉じ天国へ旅立られてしまいました。十月四日には学内の追悼会も済み、既に半年がたちましたが未だに信じられない思いです。松下先生その辺りから笑顔で出て来られるような気がして……と多くの方々の思いです。もの静かな方だった松下先生の強い印象は、女子大になくってはならない星であつたからです。原因は胃潰瘍でしたが、天に召される数日前、少し胃がわるいけど……と言われながらも楽しい夕食の一時をご満足そうな笑顔でした。七月以来続いた管理栄養士校外実習先の訪問が終つたばかりでしたから、お疲れもあつて……としか思いませんでした。私と三十年來の親友でしたので、松下さんと呼ばせて下さい。

松下さんは昭和六年神戸市で誕生、今は亡きお父様は関西学院大学の教授で神学部長をなさり、新約聖書（特に使徒パウロ）のご研究で知られていた温厚な神学者でした。昭和二十年八月当時、広島女学院の教授でしたので、ご一家は広島原爆に会い最愛のお母様は一ヶ月後に天に召されました。その後、神戸の聖和女子大教授となられた時、紀美子さ

んは広島女学院高女部より同志社女学校四年生に転校、同志社女専家政科・生活科に進まれ昭和二十六年三月卒業、二十七年四月より母校家政学科の実習助手として奉職されたのです。間もなく日本女子大家政学部食物学科に勤労学生として、仕事と両立させての努力の結果昭和三十三年晴れてご卒業、翌三十四年には研究助手になられたのです。当時私は大阪の公立中学校に勤務、松下さんとはたまたま勤労学生時代に出会いました。今日家政学部食物学科の教授として、学生時代より四十年近くを同志社と共に歩まれ、本校の教育・研究のために人生の大半を捧げられました。新制大学として発足間もない家政学部の創設時代から、縁の下の力持ちとしての献身は、厚い信仰によって支えられていたものでした。お姉様の鳴海夫人は神戸女学院大学の家政学ご出身、ご夫君は同志社大学工学部、国立広島大学理学部教授、筑波の国立図書館情報大学副学長でした。文字通り教育者・学者一家の熱心なクリスチャンホームで人格形成をされました。

教師としては栄養士・管理栄養士課程の教育を中心に、栄養指導関係には校外実習（小



学校・病院・事業所・保健所）があります。その責任者としてご苦労も多く、実習受け入れ先などに係わる業務、実習先の挨拶まわりや学生の指導、それも春・夏休み中にかかります。休暇中も心身の休まることのないお忙しきにもかかわらず、実習から報告に帰ってきた学生を、いつも心から労っておられた温かいお姿が目につびます。八年程前には学生主任として二年間の兼職中、実に良き学生の味方でいらっしゃいました。

昭和四十一年、日本女子大学栄養化学研究室に留学なさり「凍とうふ、ゆばの血漿コレステロールにおよぼす効果」の研究でラットを用いての動物実験を重ねられ、本学にて初めて動物実験をスタートされたそうです。恩師である久次米哲子名誉教授、後輩の阿部登茂子助教授と協力してビタミンB₁を主とする栄養学的実験を重ねられました。現在は栄養指導の立場から例えば「糖尿病患者の血清脂質に影響する因子」など、病態栄養学の臨床的研究、および「母子栄養指導上の問題点」など調査によるご研究を着実に進めておられました。

松下さんは敬虔なクリスチャンホームで幼

児受洗をされました。義理の両親でしたお母様が数年前に天に召されましたので、長年住み慣れた思い出多い西宮北口のお宅を整理し、京都市内に住居を移されて学校に近くなったことをよるこばれ、さあこれから大きな抱負と希望を持たれて七ヶ月後の召天でした。昨年三月に移られた京都の御幸町教会で急死の一週間前、幼い頃の洗礼を確認する誓いの式（堅信礼）を藤木牧師より受けられたのです。本学の武邦保教授は昨年九月発行の学内礼拝（奨励抜萃集）に「…私は何よりも幼児受洗後五十五歳の今に至って信仰を告白された本物らしさに驚くのです。その永い途上の信仰的のみならず、社会的なたたかいを先生は忍耐強く受けとめ、ついにその慕い愛されたキリスト・イエスのみ許にやはり今はあるのです」と述べておられます。宗教活動にも色々な形で尽力されました。女子大の旧田辺学舎での修養会にはK・Pとして奉仕なさったことも、しばしばでした。昨年一月、卒業予定者への特別礼拝で「同志社への感謝」と題して感銘深い奨励をされました。実はその二年前、別の病氣入院という試験に会われました。奨励の中で「…この経験

から私は、同志社に勤務しておられる方々、学生の方々、卒業生の方々を通して同志社の温さ、力強さを、そしてその背後にある大きな愛の御手を感じさせて頂いたのです。」「苦しかった体験を通して感謝を語られました。

その最後に「：これからの人生は花の道ばかりではありません。いばらの道にうちひしがれる時もあります。その時、皆様を支える根底にあるものは、同志社で受けた教育であるのです。聖書を聞いて下さい。きつと行手を示す言葉が、生きるために大切な真実が与えられる筈です。讚美歌を口ずさんで下さい。そのメロディから歌詞から、貴女は慰められ、力づけられ新しい希望を持たれるに違いありません。今朝の讚美歌のごとく、主イエスはしいたげられた人、友なき人のために友となられ、すべてのものを与えられ、その生涯を通して愛を全うされました。皆様はこの主イエス・キリストを見上げつつ、同志社から受けられたよき賜物を用いて、思いやりと真実をもって、まわりの方々に仕えて頂きたいと思えます。」これは松下さんのご生涯そのものだったように思われます。

表面はもの静かな、むしろ地味な存在でし

たが、何事にもよい加減ではすまされない、ひたむきな厳しさと共に、天性の優しさの具わった方でした。御幸町教会でのご葬儀には暑い夏の真盛りでしたが、ご退職の教職員、新旧の卒業生、学外の栄養士の方々など実に巾広い多くの方のご列席がありました。その後も続々と問い合わせの電話が続き、改めてご人徳が偲ばれました。

年半ばで指導者を失った栄養指導研究室ゼミの学生さんが、今ひたむきなまでに卒論に取り組んでいる様子には胸が熱くなります。学生の追悼のことばの中に「：先生は親元をはなれて暮らす私たちにとって厳しくもあり、やさしくもある母のようでした。一中略ーリユニオンの準備のために、ゼミ生でケーキを作っている時『私も何か手伝わせてください』と使った後の食器を、ずっと洗ってくださっていた先生のお姿。そして就職活動を前に『栄養士という職は地味で多くの苦労もあり、やりたくない仕事だと思えます。でも病気の患者さんに、希望を求めている患者さんに、食を通して楽しみを分けてあげるって本当にすばらしい仕事でしょう』とおっしゃってくださった最後のご指導となっていました



いました。……」

松下さんはお姉様のお子様、徹さん・温子さん（本学音楽学科卒業、二児の母）には素適な叔母様で、こよなく愛しておられました。昭和三十四年に私は母校によんで頂きましたが、楽真館の東にあった小さな建物の一部屋が松下さんと二人の研究室でした。私が出産を控えておりました頃、研究室の机の上に「無理をしないで下さい」と一言メモをつけてチーズなどそっと置いて下さったり、温かくいたわって頂きました。その後何回か研究室の移動がありました。その後何回か同志、職場での苦しかったこと、楽しかったこと色々と言えませんが、お互いに励まし合っていました。公私ともに安心して本当のことが言える掛け替えのない友でした。常に神に生かされているご自分を信じて歩まれた松下さんは、ご多忙にもかかわらず、美しさや真実に人一倍敏感な、心のすばらしい方でした。書道に、刺繍に興味をお持ちでしたし、二三日の旅をなさることがお好きでしたが、何れもお仕事に追われて実現の難しいこの頃でした。お母様（数年前天に召され、そのご看病には真似のできない程尽くさ

れました。）」とご一緒に出された句集を改めて見ますと、同志社に係わる句が多く詠まれています。

山つつじ校祖墓参の径すから

校祖新島先生のお墓は若王子山上にある。毎年新入生をつれて墓参に出掛ける。この年は五月になった。山道を登ると汗ばむ程である。ほの暗い道を登りきった時、山つつじの紅が美しく目に映じた。
（四季折々より）

家政学部の創設時代より三十四年の間、全力投球で母校に献身された松下さん、尊敬されていたお父様、お好きだったお母様の元で、どうぞお疲れをいやし、ゆつくりお休み下さい。ご生前あれ程お心にかけていらした管理栄養士の制度変更に伴う行方を、田辺キャンパス発足に伴い、様々の問題を抱えた母校の行方を、どうぞ見守っていて下さいませ。